

# 赤米ニュース

---

## 第279号

(2020年6月30日)



## 東京赤米研究会

〒186-0005 東京都国立市西3-7-29 アゼリア国立2-101 長沢方(Tel042-577-6855)

---

6月の赤米作り-----	2231
おしらせ -----	2233
おたより -----	2235
史料から読む赤米の歴史 (VII) -----	長沢利明 2235
表紙解説：東京の祭り⑥—夏越祓の茅の輪くぐり (世田谷区) — -----	2237

## 6月の赤米作り

### ●6月の赤米作りのポイント

初夏の種まきから、はや1ヶ月がたちました。皆さんのお宅の赤米稲の赤ちゃんの様子は、どうですか？。きちんと芽が出ましたか？。すくすくと早苗が順調に育っていますか？。駄目だったという方々は、今からもう一度やり直してみてください。決して遅すぎるということはないですから、大丈夫です。順調にいった方々の場合、もう赤米稲の苗はすっかり大きくなっていることと思います。初夏の日差しを十分に浴びて、これから赤米稲はもっともっと大きくなっていきます。今月は苗の成長を、さらに促進させるための、環境作りという点に重点を置いて、作業を進めていくことに致しましょう。

### ●ガス抜きパイプの設置

初夏から盛夏の頃にかけての、ミニ田んぼの土中ではこの時期、有機物が分解してガスが発生しやすくなってきています。それは土中の微生物の活動が活発化して、肥料や土壌中の養分を、活発に分解し始めるためです。その結果、土中には微生物の活動によって生れた炭酸ガスやメタンガスが溜まっていきます。ガスが地中に溜まったままですと、稲の苗の根を傷めてしまい、急速に早苗の成長がにぶったりすることがあります。そこで、そのガスを抜いて空気中に放出させてやるための通気パイプを、土の中に立ててやるのです。面倒くさいと思われる方々は省略して下さいてもかまいませんが、できることならやっておきましょう。

パイプは塩化ビニール製の管でも、ゴムホ

図3 ガス抜きパイプの設置法

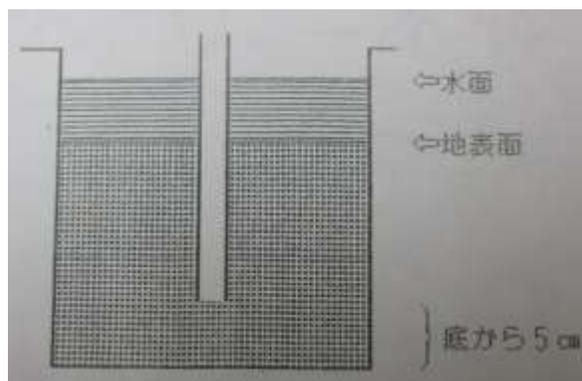


図4 バケツ栽培とガス抜きパイプ

(バケツの中央に1本のパイプを立てる。プランターの場合は2本)



ースを切ったものでも、何でもかまいません。節を抜いた竹でも、サランラップやファクシミリ用のロール紙の芯でもいいですし、要するに太い管になっていれば何でもよいのですが、トイレトペーパーの芯では、やや短かすぎますし、強度も落ちるので不適です。

ガス抜きパイプは、バケツの場合は真ん中に1本、プランターの場合は2本ほど立てて下さい。立て方は図3～4のようにし、パイプの下端が容器の底から少し離れるようにして、その上端が水面からわずかに飛び出すような形にセットします。パイプの中に水が満ちていてもかまいませんが、土が詰まっていたはいけません。中が空っぽになっていしまうと、そこからガスが抜けませんので、気をつけましょう。

### ● 苗の成長と水位の調節

6月のミニ田んぼに育つ赤米稲の早苗は、図5・写真5のような状態に成長しています。苗の草丈は約15～20cmほどに伸びているはずで、すでに5～6枚の葉が出て、早くも分けつを始めている株もあるはずです。

種まき・発芽直後の赤米稲の芽は、細い針状をしています。それが子葉で、双子葉植物のように双葉ではありません。稲は单子葉植物ですので、子葉はつねに1枚です。発芽後、2～3日しますと、子葉の先端から本葉

図5 苗の様子



写真5 成長した赤米稲の苗

があらわれてY字状になりますが、それが第1葉です。第1葉はその後、枯れてしましますが、第2葉・第3葉が次々に出てきて、6月中旬には第5葉・第6葉までが出揃い、葉先が長く伸びていきます。早苗の丈が10cmを超えた頃からは、苗の成長に合わせて少しずつ、ミニ田んぼの水位を少しずつ深くしていきます。

その結果、ミニ田んぼはいかにも田んぼらしくなっていきますが、水の深さは苗の丈の3分の1ぐらいに保ちます。苗が15cmほどに成長した時点での水深は、およそ5cmということになりますが、その後はいくら苗が大きく伸びても、水深10cmまでにとどめて下さい。あまり深く水を入れる必要はありません。ガス抜きパイプの高さも、それに合わせて調節します。水面からほんの少し飛び出たぐらいの高さが適切です。

苗には十分に日光を当て、梅雨時シーズンを迎えます。梅雨が明けて夏になれば、赤米稲は急激な成長を開始します。それは本当に驚くばかりの成長ぶりで、タケノコのようにぐんぐんと苗が伸びていきます。楽しみです。それでは7月にまたお会い致しましょう！

# おしらせ

## ●赤米の種籾配布の終了

当会では本年用の赤米の種籾を、希望者に無償配布してまいりましたが、4月中をもちまして、一応それを終了させていただきたいと思っております。本年もまた多くの方々からの配布希望が寄せられ、事務局としては極力全員に配布できるように、つとめてきたつもりなのですが、品種によっては一部で在庫が底をつき、ご要望に応えられなかったものも出てしまいました。こんなことは今までになかったことなのですが、それほど多くの希望者が殺到したということです。特に「武蔵国分寺種」の人気は高く、当会事務局にはもう一粒も残っておりません。できるだけ多くの方々にお分けしたかったのですが、そのようなわけですので、ご了承願えれば幸いです。ご要望にお応えできなかった方々に対しては、心から深くお詫び申し上げます。

## ●国分寺赤米会の共同作業

国分寺赤米会の赤米作りが、今年も始まりました。武蔵国分寺跡の史跡指定地内の畑で赤米稲を栽培するのは、これで2年目になり



耕耘機を動かす小坂さんです



みんなで畑を耕しました

ます。当初の計画では、市内の第五小学校の児童の皆さんと一緒に、4月28日(火)に赤米の種まきをおこなうことになっていたのですが、新型コロナウイルスの大規模感染を受けて、市内の全小学校が5月になってもなお休校状態にあり、残念ながら種まきは中止となってしまいました。そこで、かなり時期的に遅れてしまいましたが、5月7日(木)に畑の耕耘・除草・マルチングなどの共同作業が、会員総出で実施されることとなりました。

この日の午前10時、赤米畑には赤米会の会員のほか、小坂市議会議員・須崎元議員および協力農家の小坂良夫さんなど、約10名が集まりました。まずは小坂さんの奉仕で、耕耘機が畑に入れられ、土の耕起と畝立て作業がおこなわれます。畑も開墾2年目とあって、昨年に比べれば雑草の量はかなり減っており、これならば赤米稲もあまり雑草に負けることなく、ちゃんと育ってくれそうです。昨年はその雑草対策に大変苦労しましたので、今年は新しいこころみとして、試験的にマルチング栽培法を導入することとなり、畝2列分でそれをおこないました。黒いビニール・マルチのロールを2人がかりで伸ばしていき、別の2人がその両側に土を盛って、マルチを

固定します。畑は本格的な近代農業の圃場に生まれ変わりました。さらに、畑内に野生化して、きれいな花を咲かせていたビオラ（パンジーの一種）を圃場外に植えかえて、小規模な花壇も作られました。すっかりきれいに整えられた畑には後日、武蔵国分寺種赤米稲の種子がまかれ、一部では別に育成中の早苗を移植する予定です。

今後、新型コロナウイルス騒ぎが収束へと向かい、小学校の授業が再開されるならば当初の計画通り、秋の収穫時には五小の児童らによる稲刈り実習もおこなわれることになるでしょう。ぜひそうなってもらいたいものです。

### ●国分寺市の赤米畑の雑草群落

上記の武蔵国分寺跡の赤米畑では昨年、雑草の繁茂に大変悩まされたということ、先に述べましたが、その実態を把握し、今後の対策に役立てるため、東京赤米研究会では今回、赤米畑に隣接する草地を対象に簡単な植生調査をおこないました。調査方法はブロン・ブロンケ法（コドラート法）を採用し、2×2mの面積のコドラートを草地内に2ヶ所（①・②）設定し、雑草の出現種リストを作成して、全種の被度・群度を測定しました。調査日は2020年5月7日（木）、調査地点は東京都国分寺市西元町3丁目18番地となっております。調査結果は次表に掲げる通りです。

ここには、畑を開墾する前の原植生の姿がそのまま記録されており、見ての通り雑草のほとんどは外来の帰化植物で占められ、日本在来種の雑草は、わずかにヨモギ・ナズナ・スギナの3種を数えるのみとなっています。帰化率は地点①で84.6%、地点②で90.0%に達し、それはまことに驚異的な数字といえるでしょう。帰化率の異常な高さは、都会の空

調査地点		①	②
コドラートNo.		157	158
調査面積 (m)		2×2	2×2
全植被率 (%)		100	100
草本層草高 (m)		0~0.6	0~0.6
出現種数		13	10
帰化率 (%)		84.6	90.0
カラスノエンドウ	*	4・4	4・4
アレチギシギシ	*	3・3	3・3
アメリカフウロ	*	3・3	3・3
イヌムギ	*	2・2	
ナズナ		2・2	
スギナ		2・2	
ナガミヒナゲシ	*	1・2	1・2
ムラサキカタバミ	*	1・2	
オッタチカタバミ	*	1・2	2・2
ウマゴヤシ	*	1・2	
コヒルガオ	*	1・2	
ハルジオン	*	1・2	
オニノゲシ	*	1・2	1・2
ムラサキツユクサ	*		1・1
ホソムギ	*		2・2
ヨモギ			1・2
アガパンサス	*		1・1

注) 調査日：2020年5月7日。\*は外来種。

地などに典型的に見られる、きわめて不安定な植物群落が一時的にそこに成立していることを示しています。外来雑草はいずれも好窒素性の一年草・多年草で、大量の種子を赤米畑の中へ供給しますから、計画的な駆除が必要で、将来はこの東側の草地そのものを完全に消滅させるか、農地に転用した方がよいのかも知れません。

一方、赤米畑の圃場内に大量発生する畑地雑草のカヤツリグサ・オヒシバ・スベリヒユなどは、この時期にはまだ現われていません

が、これから夏場にかけて旺盛に発芽・成長していきますから、警戒の手をゆるめてはいけません。早めに芽を摘んでしまうのが一番です。とはいえ、開墾1年目の昨年に、多年草類の根をかなり除去していますので、2年目の今年は、その成果が現われるものと思われれます。マルチング栽培法の効果も含め、かなり今年は期待が持てるのではないのでしょうか。

---

## おたより

### ●大嘗祭の問題（刀根卓代）

『赤米ニュース』の「稲の収穫祭と神社信仰」で取り上げられた大嘗祭、特に関心深く拝読しました。先の大嘗祭(1990年)の時の、長沢先生が掲載して下さった写真、とても貴重と存じました。私もこれを読んで、今回の大嘗祭ではさっそく皇居に出かけ、大嘗宮を見て参りました。かつて柳田国男が、大正の大嘗祭の所感において、もっと質素にすべきであると述べていたにもかかわらず、何の検討もされることなく大嘗殿が造られ、大嘗祭が行われていくことに疑問を持っておりました。長沢先生の御論考(御講演)を拝読し、ようやく今回の政府の対応に疑問を呈する人類学・民俗学者も居たことがわかり、大変嬉しく思いました。1990年の時の歴史科学協議会の「大葬・即位礼・大嘗祭」のような発言は、今回何もありませんでした。為政者によって造られていく伝統—どうしようもないことだと思いつつ、それをそのまま鵜呑みにするのが民衆だとしたら…いろいろ考えがつきません(1/3:東京都八王子市)。

## 史料から読む赤米の歴史(VII)

長沢 利明

### 4 近代の赤米史料・つづき

フィリピンでは現在でも、多くの赤米品種が栽培されており、私たちが現地から種子を入手して、東京で育ててみたことがあります(写真10)。

しかし、イロカノ族の村で赤米飯を食べた後、阿利氏らは飢えとマラリアとに苦しめられながらの、まさに地獄の逃避行に追い込まれていき、米軍の攻撃を受けて重傷を負いながらも、何とか終戦の日まで生きのびて、友軍の基地へとたどり着くことができたというのです。引用文の後段はその時の記録で、やっと口にするのできた食物は、やはり赤米飯だったと書かれています。むさぼるようにそれを食べて、やっと人間を取り戻したと、



写真10 フィリピンの赤米稲

阿利氏は記しておられます [長沢, 2003]。赤米とともに語られた、悲惨な戦争の真実の記録として、この史料は重要な価値を持つものといえるのではないのでしょうか。

## おわりに

約 1200 年間にも及ぶ日本の赤米の歴史を、古代から近現代期に至るまで、さまざまな記録を紹介しながら、ここでは眺めてきました。いろいろな史料を取り上げてきましたけれども、それぞれの時代状況にふさわしい、代表的なものを 14 点ほど選んでみたつもりです。長い日本の歴史の流れの中で、あまり目立たない形ではありながら、赤米というものが、それなりに大切な役割を演じてきたことが、おわかりいただけたでしょうか。

なお、注意をしておかなければならないのは、それぞれの史料の中に登場する赤米稲は、決して同じ単一の作物種ではなく、実はいろいろなものが含まれているということなのです。冒頭に述べたジャポニカ種・インディカ種・ジャヴァニカ種の 3 亜種区分でいいますと、それはどのように分類されるのでしょうか。古代の飛鳥～奈良時代の木簡資料や、正倉院文書に記されていた赤米は、もちろんジャポニカ種赤米稲ということになります。『宇津保物語』に出てくる「赤き粥」や、『枕草子』に記された「いと赤き稲」が、本当に赤米に由来するものであったとしたならば、それもおそらくはジャポニカ赤米稲であったことでしょう。とはいえ、プラント・オパールの方折結果から見るかぎり、縄文～弥生時代からそれに引き続く奈良～平安時代の日本には、インディカ種やジャヴァニカ種の稲も存在したことがわかっており、日本の稲が今見るように、ほぼジャポニカ種一辺倒に統一されていくのは、後の時代のことであったらしいと

もいわれているのです。

そして、中世の鎌倉～室町時代には、新たに大陸からインディカ種赤米稲がもたらされることとなり、『犬筑波集』や『清良記』に記された赤米は、まちがいなくそこに属するものであったといえます。その後の近世江戸時代についてはどうだったでしょう。井原西鶴の一連の作品に登場する赤米は、もちろんインディカ種赤米で、それはすでに貧しい人々の主食穀物となっていたのです。しかしながら、東北の津軽地方には古代以来の伝統を引き継ぐ、ジャポニカ種赤米稲もしぶとく生き残っており、『耕作晰』にはそれこそが本来、北辺の農民が作るべき稲なのだと、老農がつぶやいていたことが印象的です。

こうして日本列島の各地に残存した赤米稲も、近代期の撲滅運動を通じ、ジャポニカ種・インディカ種の別を問わず、消え去っていく運命にあったということも、宮城県の農政資料から知ることができました。そのようにして、日本国内の赤米稲は、列島の津々浦々から姿を消していくことになってしまったのですが、アジアの各国には現代に至るまで、それが普通に栽培されており、飢えたる落武者と化したかつての日本兵がそれと出会い、生命をつなぐことができたというのも、大切な歴史上のエピソードではなかったのでしょうか。戦時下のフィリピンで栽培されていた赤米稲は、おそらくインディカ種もしくはジャヴァニカ種赤米稲ではなかったかと推定されるのです。

日本人と赤米の歴史は、こうして今私たちの生きる現代世界へとつながっていくのです。温故知新の精神にもとづいて、私たちが歴史から学ぶものは多大です。今、私たちが推し進めている赤米復活運動は、実はこれらの長い歴史の延長線上に位置づけうるものなので

す。私たちは歴史を踏まえながら、そこに新たな現代的な価値をも見出しつつ、まったく新しい赤米の歴史を、これから作り出していかねばなりません。「赤米新時代」が始まりつつあり、今まさにそこに踏み出そうとしている私たちが、ここにいるということなのです。(完)

#### 【付記】

本稿は東京都国分寺市の恋ヶ窪公民館の主催によって開催された、赤米講座における筆者の講演内容を加筆してまとめ直したものである。講座は「いにしえのお米に学ぶ—赤米の歴史に詳しくなる—」と題し、2018年9月27日(木)に東京都国分寺市西恋ヶ窪4-12-8の恋ヶ窪公民館講座室Ⅱにおいておこなわれた。講演にあたっては、同館社会教育主事の梅原 薫さんをはじめとする多くの方々から多大なご協力をいただいたので、ここに記して深謝申し上げる次第である。

#### 引用文献

- 阿利莫二, 1987『ルソン戦—死の谷—』, 岩波書店。  
藤村 作 (校注), 1950『井原西鶴集 (二)』(日本古典全書), 朝日新聞社。  
村上啓一, 1968「明治・大正期における宮城県農業の進展」『宮城県史』Vol. 9, 宮城県。  
河野多麻 (校注), 1961「宇津保物語 (二)」『日本古典文学大系』Vol. 11, 岩波書店。  
松浦郁郎・三好正喜・徳永光俊 (校注), 1980「清良記」『日本農書全集』Vol. 10, 農山漁村文化協会。  
宮田和一郎 (校注), 1951『宇津保物語 (三)』(日本古典全書), 朝日新聞社。  
長沢利明, 1999 a「赤米の歴史と文化」『「国分寺の赤米」情報』No.2, 国分寺市民俗資料室。  
長沢利明, 1999 b「赤米雑話 (20)」『赤米ニュース』No.27, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 1999 c「赤米雑話 (20~22)」『赤米ニュー

- ス』No.27~29, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 1999 d「『成形図説』に見る赤米の品種及び異称」『赤米文化』No.14, 赤米文化教育研究会。  
長沢利明, 1998-1999「赤米雑話 (9~12)」『赤米ニュース』No.11~18, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 2000「赤米雑話 (34)」『赤米ニュース』No.45, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 2001「赤米雑話 (35)」『赤米ニュース』No.46, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 2002「赤米雑話 (50)」『赤米ニュース』No.69, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 2003「赤米雑話 (54~55)」『赤米ニュース』No.73-74, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 2004「赤米雑話 (68)」『赤米ニュース』No.90, 東京赤米研究会。  
長沢利明, 2017「国分寺の赤米の20年 (I~IX)」『赤米ニュース』No.240~248, 東京赤米研究会。  
長塚 節, 1993『土』, 中央公論社。  
酒井順子 (訳), 2016「枕草子」『日本文学全集』Vol.7, 河出書房新社。  
桜井秀・足立勇, 1996『日本食物史』上巻, 雄山閣出版。  
渡辺 実 (校注), 1991「枕草子」『新日本古典大系』Vol.25, 岩波書店。

---

#### 【表紙解説】東京の祭り⑥—夏越祓の茅の輪くぐり— (世田谷区)

神社の境内に「茅の輪 (ちのわ)」、すなわちススキを束ねて作った大きな輪を設け、参拝者らがそこをくぐって心身に宿った罪穢れを祓う行事が年に2回、6月30日・12月31日におこなわれている。6月のそれを「夏越祓 (なごしばらい)」といい、これから迎える猛暑の夏を控えて身を清め、健康に暮らせるようにとの祈願がそこに込められている。大きな神社であれば、どこでもなされているが、写真は世田谷区の松陰神社のものである。松陰神社は幕末の志士、吉田松陰の霊を祀った神社で、境内には松陰の墓もある。